



## 長倉先生をめぐる人の輪

Haruo HOSOYA 細矢治夫 長光会, お茶の水女子大学名誉教授

長倉三郎先生の最大のご業績は分子科学研究所の創設にあるが、それに関して筆者はすでに本誌等にかなり詳しく書き記したし、本号にも多くの方がそれぞれの立場からの話を綴られるであろう。また筆者自身は長倉先生の門弟の中の最年長の1人であるが、多くの後輩たちが「長倉研の思い出」を書いてくれるはずなので、ここでは長倉先生のご活躍を様々な形で支えた方たちの関わる、巷間に知られていない話を紹介することにした。文中で敬称は省略させていただく。

先生の恩師の水島三一郎は東京大学理学部化学教室の重鎮であるだけでなく、分子の静的な構造の解析によって国内外の物理化学分野で大きな存在感を示しておられた。しかし、当時特に我が国においては、帝国主義を標榜する物理の人たちに内弁慶的な化学の役割を正に認識させるところまでには至らなかったのである。

一方、国内の多くの化学教室においてヒエラルキー的な人間関係が学問の健全な発展に縛りをかけていた。そういう時代の1959年に、長倉先生は東大物性研で教授職を得たのである。その中で、化学は長倉三郎、井口洋夫、斎藤喜彦、塩谷繁雄のわずか4研究室だけが物理に囲まれていた。そこでの人事の大原則は、「大学院生は博士を取ってもその助手になれない」、「助手はその助教授になれない」の2つである。このため長倉研の「さらりとした人間関係」が生まれただけでなく、分子研にもこの大原則が生かされている。長倉先生が物性研で学ばれた大きな不文律である。このほかにも、長倉先生は物理の人と接触する多くの機会をもたれたのだが、その始まりは1955年のシカゴ留学にある。受け入れ主のR. S. Mullikenの研究室はシカゴ大学の物理教室にあったし、そこには小柴昌俊がいた。小柴はオヘア空港に日本の研究者が到着するという情報を掴むたびに、長倉先生を自分の車に乗せて迎えに行ったそうである。小柴はロチェスター大学でPh.D.取得後シカゴ大の研究员になったばかりというタイミングで、2人の友情関係は人知れず長く続いていたようである。筆者は長倉先生の書齋で、先生が何かの受賞の折に小柴から届いたお祝いの品を目撃している。

また東大物理教室の小谷正雄とのコンタクトは大きい。そのきっかけは多分、1962年に東京で開かれた分子分光・構造の国際会議であろう。小谷はその組織委員長で、海外からかなり多くの長倉先生の知り合いの研究者が来日して会議は盛況裏に終わった。その直後井早康正・青野茂行の2人が小谷に急接近して、その翌年には小谷、青野、井早の3名による「分子科学研究所設立趣意書」が文部省に提出されたのである。当時筆者は物性研の博士課程の学生だったが、この両氏

が頻りに長倉先生に会いに来られていたことを記憶している。そしてその後の推進役を長倉先生が引き受けられ、物性研を舞台に「分子科学研究所小委員会」が長倉ペースで開かれていき、1975年の分子研創設という大きな実を結ぶことになったのであるが、井早、青野という2人の若き化学者の頑張りやを忘れてはならない。

その小谷が生物物理に転身しようという気構えを物理のお弟子さんたちに伝えるべく2泊3日の「湯ヶ島会談」なるものが伊豆で開かれた。化学者の中から選ばれたのは長倉先生だけだったが、先生は細矢、岩田末廣、松下利樹の3名にその代役を託されたのである。弟子の筆者らは、その機会に藤永茂、土方克己、大野公男等に紹介されるという大きなお土産を得たのである。

物理とは裏腹に、東大の化学教室の物性研を見る目は冷ややかだったが、赤松秀雄は一貫して長倉先生に好意的な態度を貫かれた。1959年筆者が学部4年の春先に、長倉先生は化学科の4年生相手に新設の物性研の紹介と希望者の募集を行ったのだが、不肖の筆者はサボってその名演説を聞きそこなってしまった。ところが同級の矢田浩はいたくそれに感激して、半年間の卒業研究も長倉先生の下でやりたいと熱望したので、学科主任の赤松は特別にそれを許可して下さったのである。それ以後長倉先生の定年退官までの二十数年間を通じて物性研で卒研をやったのは彼だけである。物性研の大学院進学は許可しているのに、卒研は認めないというのが東大化学教室のスタンスであった。その赤松は東大定年後横浜国立大学に移り、そこで工学部長になり1975年に学長にも選ばれたのであるが、丁度分子研の所長選考と重なってしまった。そして選択されたのが初代の分子研所長職である。

また分子研設立という化学者集団の強い要望を現実のものにしたのが伏見康治という物理のドンである。彼は理学系の研究者集団から提出された20を超える研究所設立案の中から、分子研を筆頭に3研究所を選び出す役を果たされたのである。当時ほかにも、茅誠司、山下次郎の2人の物理の大先生も長倉先生に好意的な動きをされたことを筆者は知っている。

一方、先生と年の近い化学の人たちはどう思っていたのであろうか。先生の著書『「複眼的思考」ノススメ』の中に「ドクター電荷移動」という自分のあだ名を紹介しておられるが、このほかにも「パイちゃん」とか「長くしゃべろう」というあだ名も密かに囁かれていたようである。長倉先生も緑子夫人とご一緒に苦笑いされるような与太話ではあるが、先生の墓前にこの文を捧げたい。